

第4章

子供と共につくる
安全マップ

第4章

子供と共につくる安全マップ

子供と地域を犯罪から守るために！

子供と共に安全マップを作ることを通して、子供自身が危険箇所を実感できるよう配慮することが大切であり、ひいては子供たちの危険予測能力や危険回避能力を高めていくことが重要です。作成に当たっては、子供がよく通る道路や子供が遊んでいる場所、犯罪が起こった場所、交通事故の危険がある場所など、子供が危険箇所を実感できるようにし、子供が保護者や地域の方と共につくるのが大切です。

また、マップを作成する際には、①活用の目的に合わせた特徴あるマップの作成、②作成の手順や作成時間の計画、③保護者や地域、関係機関の声を取り上げながら連携を図り、マップづくりをすることが大切です。

実感できるマップの作成

マップづくりで危険予測能力や危険回避能力の向上を

子供が犯罪に遭わないようにするためには、子供自らが危険な場所を発見できるようにならなければなりません。

具体的に『危険な場所』とは、だれもが『入りやすい場所』と周りから『見えにくい場所』です。子供が、誰かにその場所を教えてもらうのではなく、自分の力でその場所を見付けることができる取組を行うことによって、子供の意識や危険予測能力、危険回避能力は高まっていきます。

このような意識と能力を高めるための有効な手法の一つが、犯罪や交通事故の面での危険箇所を自らの手で調査・作成する安全マップづくりの活動です。

子供が自分の力で危険な場所を見付ける取組を



現地での調査

《『危険な場所』は、こんなところ！》

◆だれもが『入りやすい場所』

⇒ 犯罪者が怪しまれずにみんなに近付いて、悪いことをしてからすぐに逃げられるような場所

◆まわりから『見えにくい場所』

⇒ 犯罪者が隠れていても分からず、悪いことをしても見付からないような場所

作成したマップを活用して



子供とともに作る安全マップ



- (1) 子供がマップを見ることで、危険箇所などの実態が分かり、自分が今まで気付かなかった危険箇所などの理解も深まり、危険回避能力がはぐくまれる。
- (2) 学校として、的確な対策が講じられる。
・通学路や「子ども110番の家」の決定。
- (3) 安全マップを活用した地域防犯活動を通して、被害防止意識や地域コミュニティがはぐくまれる。

マ ッ プ づ く り の よ さ

- ① 危険箇所などの情報が一目で理解できる。
- ② 交通事故や犯罪の面での危険箇所やよく遊ぶ場所、通学路などのヒヤリ感の情報などの関連がイメージしやすい。
- ③ 情報の蓄積や更新が可能である。
- ④ 必要な情報の重ね合わせや抽出が可能である。
- ⑤ マップを作成する作業自体が楽しい。

<留意点> マップを作成する上で配慮すべきこと

時数や取組の形態

- ・総合的な学習の時間を使って取組を進めたり、生活科の学習や社会科の学習と関連させて、取り組んだりすることもできます。
- ・学級や学年を母体とした取組の形態や、異学年で協力して取り組む形態などが考えられます。

中学校や高等学校での作成

- ・中学校や高等学校での安全マップの作成に当たっては、総合的な学習の時間や生徒会活動の他、PTAの組織と連携を図って作成することもできます。

子供への配慮

- ・危険な場所を表示した安全マップでは、被害を受けた子供の体験やトラウマ（心の傷）などに対する配慮が必要になります。

不審者を見極める際の配慮

- ・不審者が出没した場所を表示した安全マップでは、特定の人が不審者扱いされないような配慮が必要です。

効果の期待できる3つの代表的な安全マップ

1 子供たちが互いに協力して作成する安全マップ



「子ども110番の家」オリエンテーリング

子供たちが、自分の目で校区内の危険な場所を確かめるフィールドワークの活動を通して、自分で危険かどうかを判断する力を身に付けることができるマップです。

実感できるマップの作成で
地域コミュニティのはぐくみを！

2 子供たちが保護者や地域の方々と協力して作成する安全マップ



保護者が協力して現地調査

保護者や地域の方々からの情報も活用し、客観的で正確な情報を盛り込んだマップです。このマップに下校時刻や集団下校のコースなどの情報を盛り込み、保護者や地域の方々に配布することで、取組への協力が期待できます。

3 子供たちと関係機関が連携して作成する安全マップ



専門機関の方々と改善策の検討

専門機関と連携し、客観的で正確な情報を基にマップを作成すると、精度の高いマップを作成することができます。

《子供と共につくる
三つのマップ》

1 子供たちが互いに協力して作成する安全マップ

子供が作る安全マップの取組

作成の手順

事前学習

マップづくりの意義と取り組み方

作成する安全マップのねらいに合わせて、グループの形態や活動時間を工夫することが大切です。ここでは、具体的な活動展開例等を紹介します。

《活動展開及びおおまかな時間配分》

事前学習 <2～3時間>



フィールドワーク <4～6時間>



地図の作成 <4～6時間>



発表 <1～2時間>

グループで安全マップを作るぞ！



安全マップづくりには、子供たちが自ら校区内を探検する活動を通して、犯罪が起こりやすい場所を自分の目で確認し、安全な場所及び危険な場所に対する見方・考え方を深め、安全な生活をつくり出そうとする実践力を養うことが大切であり、このことを子供たちにも理解させます。

さらに、安全マップづくりの取り組み方についても子供たちの興味・関心を高めるように説明することが大切です。

○グループ（4～6人）ごとに校区内の分担された地域のフィールドワークを実施し、実際に自分の目で見て判断した《安全な場所》と《危険な場所》を表示した安全マップを作ります。

なお、安全な場所と危険な場所については、具体的に教えておくようにします。

《安全な場所》→守ってくれる場所

- ・「子ども110番の家」
- ・コンビニエンスストア
- ・スーパーマーケット
- ・交番
- ・商店街のお店
- ・ガソリンスタンド
- ・公共の施設
- ・病院 など

《危険な場所》→[入りやすい場所]と[見えにくい場所]

- ・ポイ捨てされたゴミや割れた窓ガラスが放置されている
- ・自転車が放置されている
- ・高い塀に囲まれている
- ・駐車違反の車が止まっている
- ・雑草が伸び放題になっている
- ・落書きが書かれたままになっている など



事前学習を行っている子供たち

グループの決定

学年構成や調査場所によって、多様な活動グループ（4～6人）が考えられます。

※グループのメンバーに役割（リーダー、地図係、写真係など）をもたせることも大切です。

①学年構成によってグループを決める

- ・同学年で構成するグループ（学級または学年）
- ・異学年で構成するグループ

②調査場所によってグループを決める

- ・住んでいる場所が近い子供同士で構成するグループ
- ・調べたい場所が同じ子供同士で構成するグループ

フィールドワークの計画

《計画づくり》

◇どのような経路でフィールドワークを行うかを決める。

※危険な場所を予想しながら経路を決めるようにする。

◇だれにどんなことをインタビューするかを決めておく。

◇フィールドワークに必要な持ち物を確認する。

フィールドワーク

各グループごとに校区内の分担された地域のフィールドワークを実施します。発見した安全な場所や危険な場所を地図に書き込んだり、デジタルカメラで撮影したりしていきます。

危険な場所と決める際には、「なぜ危険な場所であると考えたのか」を話し合い、理由をはっきりさせることが大切です。

《フィールドワークに必要なもの》

- ・地図
- ・筆記用具
- ・メモ用紙
- ・時計（グループに1つ）
- ・デジタルカメラ（グループに1機）
- ・腕章（「安全マップ作成中」と書かれたもの）
- ・水筒
- ・帽子
- ・ハンカチ
- ・ちり紙
- ・探検バックまたはA4サイズのクリップボード



フィールドワークを行っている子供たち

保護者・ボランティアの活用

フィールドワークでの子供たちの安全を確保するため、保護者や地域の方々にボランティアとして参加していただくことも考えられます。危険な場所を共に考え、アドバイスを受けることもできます。

子供の目線に立って一緒に活動する



フィールドワークを行っている子供たち

冬季用のマップづくりを通じた安全対策

札幌市では、夏と冬とでは道路の状況が大きく異なり、それに伴って危険な場所も変わってくることから、冬季用の安全マップをつくることも大切です。

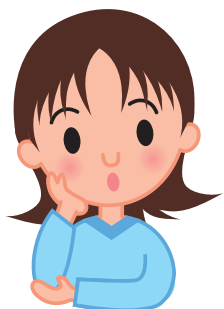


冬道の危険箇所を調べている子供たち

《冬季の危険な場所》

- ・大きな雪山がある。
- ・除雪機によって積まれた雪で見通しが悪くなっている。
- ・凍って滑りやすくなっている。
- ・歩道に雪が積まっているため、車道に出て歩かなければならなくなっている。
- ・屋根の軒先に大きなつららができている。

冬の安全マップは、夏とは違うね！



冬道の危険箇所を調べている子供たち

地図の作成

各グループごとにフィールドワークで調べたことを大きな紙（模造紙など）にまとめます。

安全な場所と危険な場所を地図上に表すとともに、危険な場所であると判断した理由をはっきり書き表すことが重要です。

大きな紙を使った安全マップの作成

《作成上の配慮事項》

- ◆撮影した写真が、特定の住宅や商店などを危険な場所としての説明に使われないようにする。
- ◆実際に犯罪が発生した場所を説明する際には、被害に遭った子供が特定されたり、心の傷を深めたりすることのないよう、プライバシーに十分配慮する。



子供たちが作成した安全マップ

《見やすくするための工夫》

- ・フィールドワークで撮影した写真を貼って、場所や理由を書き込む。
- ・危険な場所や安全な場所を色分けして表示する。
(例) 赤色→危険な場所
青色→安全な場所（「子ども110番」の家など）
- ・地図は、拡大機を使って拡大したものや大きな道路のみを大まかに書いたものを活用する。

発表

各グループ毎に作成した安全マップを提示しながら、校区内のどこがどのような理由で危険な場所なのかを発表できるようにします。

発表の場は、どこが危険な場所なのかを知るとともに、交流を通して危険な場所であると判断するための理由がわかることが大切です。

《発表における配慮事項》

- ・教師は、必要に応じて子供の発表の内容を補足説明したり、問い返したりして、危険な場所であると判断した理由をはっきりさせるようにかかわる。
- ・発表を聞き合った後に、これから自分はどういう点に気を付けるのかを考える場を設定する。



安全マップを発表する子供たち

2 子供たちが保護者や地域の方々と協力して作成する安全マップ

地図に盛り込む 内容の決定

安全マップは、子供たちが地域・保護者と協力しながら作成していくこともできます。

保護者や地域の方々にとって子供の安全を確保するために何をすればよいのかがわかる安全マップを作成することが大切です。例えば、次のような内容を盛り込むことが考えられます。

※PTAの安全に関わる部会（社会部など）の協力を得ながら安全マップづくりに取り組むという方法もあります。



保護者の方々と教職員との打ち合わせ

《安全マップに盛り込む内容例》

- 安全に注意する場所
 - ・赤色マーク→不審者が入りやすく、犯罪が見えにくい場所
 - ・緑色マーク→車の通行に気を付けた方がよい場所
 - ・Pマーク→駐車場の出入りに注意する場所
 - ・×マーク→冬季に落雪の危険があるため通行禁止になる場所
- 「子ども110番の家」
- 集団下校コース
- 登校時刻
- 下校時刻（曜日別、学年別の下校時刻）
- 下校時の平均通過時間
（学校から歩いて何分の地点かを表示したもの＝5分ごとの通過時間を下校コース上に表示する）
- 緊急連絡先（警察署、学校などの電話番号）

必要な情報の 収集

犯罪が起こりやすい場所（入りやすく見えにくい場所）に関する情報を保護者や子供から集めます。

情報を集める際に、保護者に対しても「犯罪が起こりやすい場所は、入りやすい場所と見えにくい場所である」ことを伝え、家庭で話題にしたり実際に子供と一緒に歩いて危険な場所を確認したりしていただけるように呼びかけます。教師主体で作成する地図であっても、子供の危険予測能力や危険回避能力を高めるような取組にしていくことが必要です。

《情報収集のポイント》

- ・子供や保護者に「入りやすい場所」と「見えにくい場所」がどのような場所であるかを教える。
- ・まちづくりセンター、「子ども110番の家」、町内会などからも情報を収集する。



保護者の方々とフィールドワークする

保護者や地域の方々の安全に対する意識が高まります！



町内会の方々とのフィールドワークする

地図の作成

A3判以内の大きさの紙を使って、可能な限り正確な情報を盛り込んだ地図を作るようにします。

犯罪が起こりやすい場所を子供たちや保護者、地域の人たちと確認しながら地図を作成します。



保護者や地域の方々との打ち合わせ

配布して、活用してもらえようとする！



《作成上の配慮事項》

- ◆「危険な場所」や「犯罪が起こりやすい場所」という言葉を使わず、別の言葉（例えば「不審者が入りやすく、犯罪が見えにくい場所」など）で表現する。
※その場所に住んでいる子供に不安を抱かせないように配慮する。
- ◆危険な場所や冬期間通行禁止になる場所は、その場所を撮影した写真を盛り込むことで、理解を図ることができるようにする。
- ◆吹き出しなどを使って、危険な理由を説明する。
- ◆保護者や地域の方々ができる《子供を守る取組》へのお願いを盛り込む。

（例）「登下校時に腕章をつけてパトロールをお願いします！」等

地図の印刷・配布

家庭・地域への働きかけ

作成した安全マップは印刷して全家庭に配布し、家庭の中で安全について日常的に話題としてもらうようにします。懇談会等を通して、家庭でできることに取り組んでいただくように啓発していくことも大切です。

また、まちづくりセンター、町内会、「子ども110番の家」などへも配布して、登下校時の安全パトロール等の取組に生かしてもらえようように働きかけることも大切です。

3 子供たちと関係機関が連携して作成する安全マップ

実態の把握

アンケート ・ 既存情報の 収集

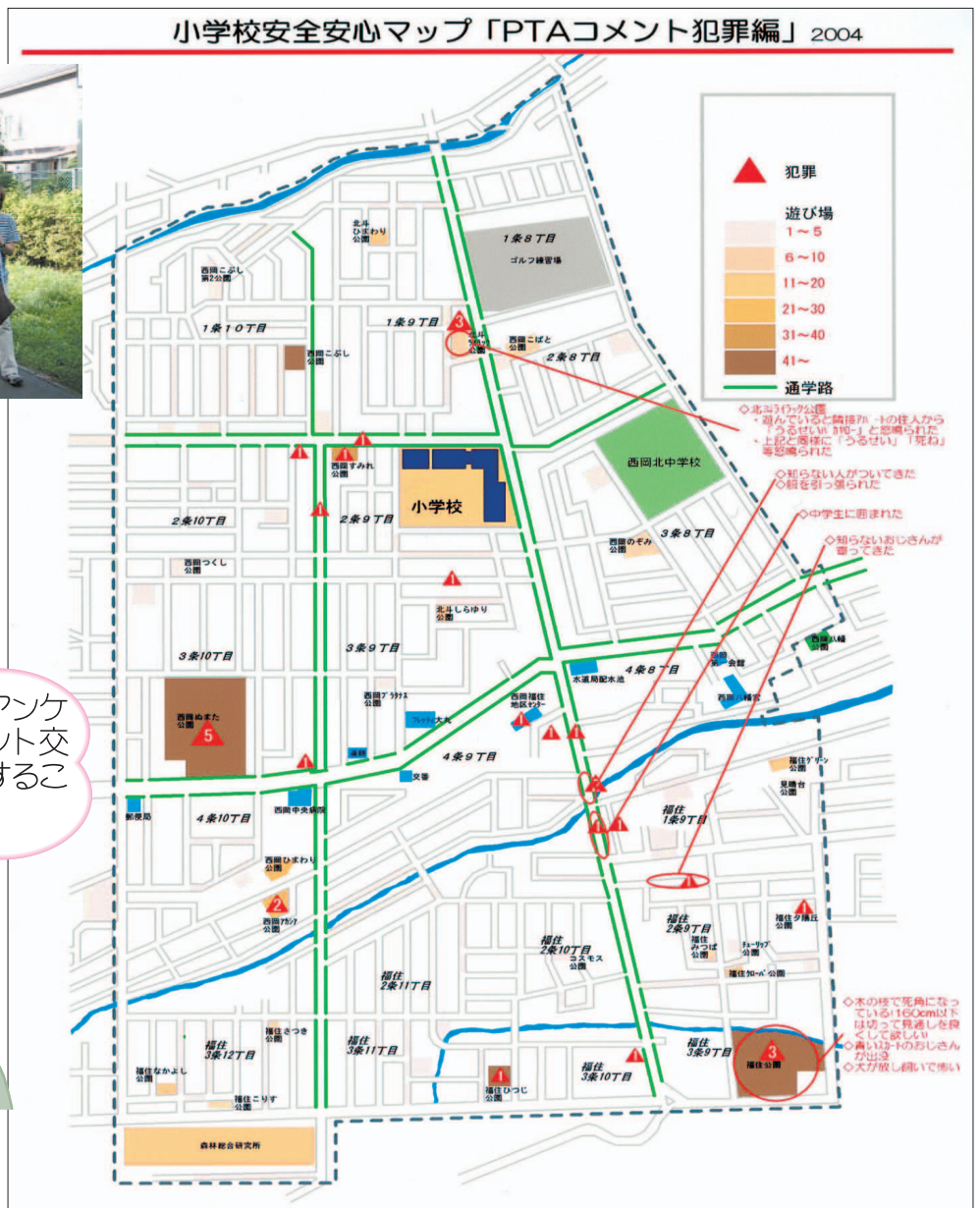
ソース別の 情報

子供たちがどこでどのような犯罪や交通事故の危険にしているのかを把握し、情報として整理します。夏季と冬季では、道路や公園などの危険箇所やその要因が変わるので、年2回実施すると有効です。

- ・ 子供にアンケートを実施し、犯罪の面や交通事故の面でそれぞれ怖い思いをした場所、内容、時間などを把握します。
- ・ 保護者と一緒に記入すると、正確な場所の情報を入手できると共に、保護者が子供の行動を把握でき、安全に対する意識が向上します。
- ・ 警察署から犯罪や交通事故などの情報を収集します。
- ・ 町内会の方や郵便局の配達員の方からも情報を収集できます。
- ・ 集めた情報は、マップ上に表します。
- ・ ソース別に情報を分類し、後に必要な情報だけを取り出せるようにしておきます。



地域の現状の把握



このほかにも、実施したアンケートを基に、PTAコメント交通事故編のマップを作成することもできます。



要因の分析



マップに基づく現地調査

現地調査で要因の分析

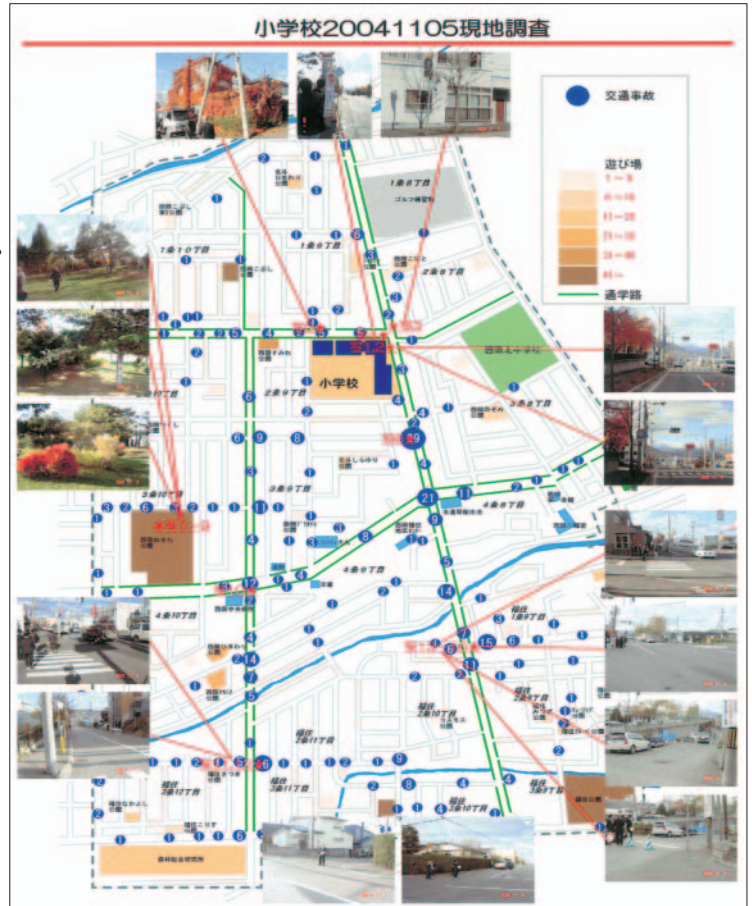


関係する方々との現地調査

改善策の検討

調査に基づいた改善策の検討

- ・アンケートや既存情報、安全マップの作成等で明らかとなった危険な場所や状況、その要因を基に、改善策を検討します。
- ・現地調査で撮影した写真と要因をマップ上に記載し、子供やPTA、警察、行政機関、地元の住民などが一緒に検討することが重要です。



現地調査の情報をまとめたマップ



関係機関の方との会議



現地での改善策の検討

《改善策の検討の際に対象となること》

◇空間構造に関すること（ハード面）

- ・信号機や一時停止の設定、歩道幅員の拡幅など。
- ・防犯等の設置や最近では防犯カメラの設置など。

◇制度、コミュニティ等に関すること（ソフト面）

- ・通学路変更や「子ども110番の家」設定、除雪方法、重点エリア見回り、住民の日常的な声掛けや駐車マナー改善、歩行や自転車乗車マナーなどの指導。

改善策の実施と安全マップの見直し

- ・すぐに取り組むこと、時間はかかるが必ず改善すべきことなどに分け、具体的に実施していくことができることから取り組みます。
- ・マップ完成後、登下校時に通る道の調査を行い、データを重ね合わせると、「子ども110番の家」の存在価値がはっきりします。「子ども110番の家」が少ない地域には、再募集をします。出来上がったマップを見直していくことが大切です。

完成した安全マップ

このように、専門機関と連携し、客観的で正確な情報を基にマップを作成すると、校区内の交通事故や犯罪にかかわるデータが集積された精度の高いマップを作成することができます。

なお、夏版のほかに冬版のマップを作成すると、夏と冬の交通事故や犯罪へのヒヤリ感の比較が可能になります。

また、これらの取組を進めることで、地域とのつながりや自分の生活、安全安心に対する子供の意識は深まり、実践力も高まります。



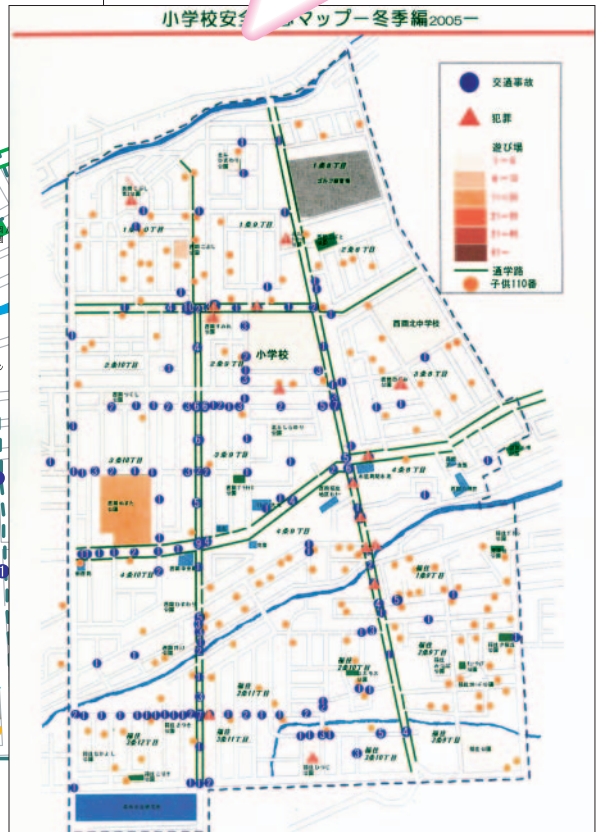
この完成した安全マップを活用した取組の効果は、
 ①危険箇所を理解でき、危険回避能力がはぐくまれる
 ②危険箇所の実態が分かり、的確な対策が講じられることなどです。

〇〇小学校安全安心マップ2004夏



夏の安全マップだけでなく、冬の安全マップを作成し、1年間を通した子供の安全を確保することが重要です！

小学校安全安心マップ—冬季編2005—



安全マップ冬季編

登下校時に子供が一人になる所を把握できる安全マップ

子供が不審者からの被害を受けたり、事件に巻き込まれたりすることが多いのは、登下校時に一人になった場合です。

子供が登下校時に一人になる所が分かるマップを作成すると、学校での指導に生かしたり、町内会の方やスクールガードの方にお渡ししたりして、見回りの活動に生かすことができます。

《作成の手順》

- ①学校の全家庭に校区の地図を配布し、登・下校の時に二人以上で通る道には青、一人になる道には赤の線、危険な箇所には印を付けてもらいます。
- ②保護者のアンケートを地図にまとめ、学級の安全マップを作成します。
- ③学級のデータを重ね合わせ、学年の安全マップを作成します。
- ④曜日別の下校パターンに対応した安全マップを作成します。

アンケートで、保護者の安全意識も高まります。

《作成のポイント》

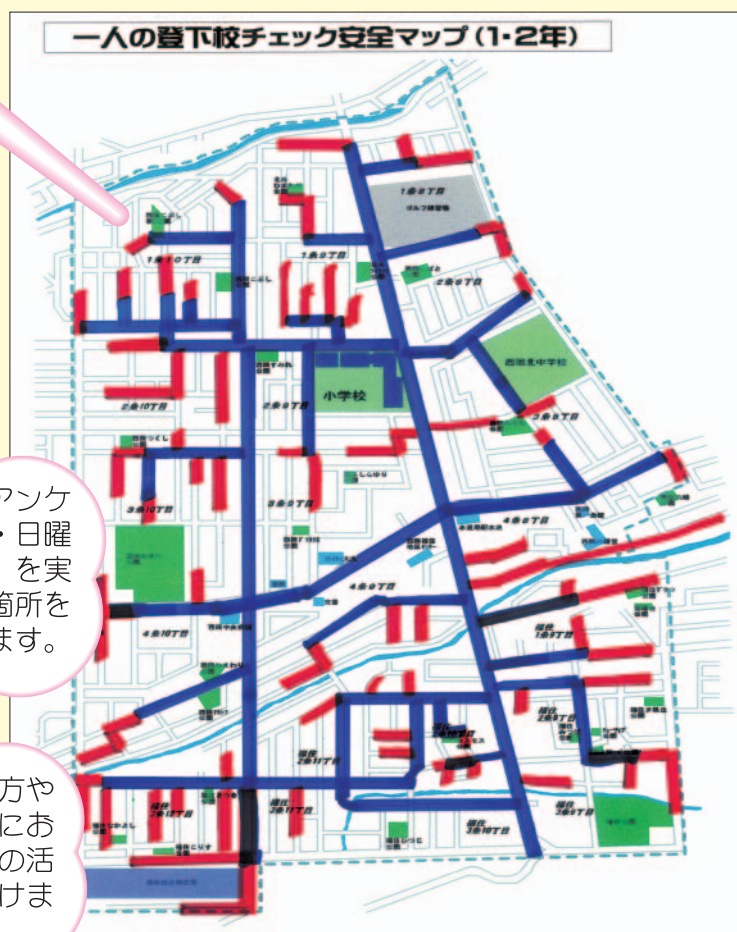
- ①すべての家庭からアンケートをとることが大切です。
- ②作業は担任が行い、児童の家を地図上に記載すると友達関係の把握にも役に立ちます。
- ③学年の担任が合同で作業を行い、学年の実態を把握することが重要です。
- ④学校の安全担当者は、曜日別、下校の体制に応じたマップを作成します。

赤のラインの道が登下校時に子供が一人になる所。

下校の時、一人になる所から家までは小走りで帰るように指導すると、被害を受けることが少なくなります。

マップや保護者のアンケートを生かし、土曜・日曜参観日に『親子登校』を実施して、実際の危険箇所を確認することもできます。

マップを町内会の方やスクールガードの方にお渡しすると、見回りの活動に生かしていただけます。



1・2年の安全マップ

子供と共に つくる 安全マップ



「子ども110番の家」を訪問するオリエンテーリング
おうちの人の顔がわかって安心できました！



調査を終えてみんなで作った「子ども安全マップ」
縦割りグループの汗の結晶！



安全マップを使った発表会
どんなマップができたのかな？



土曜参観日は親子登校日！
通学路の安全を確かめながら親子で登校